

国際中学校・高等学校の生みの親 「土山登先生」を偲んで



土山登氏略歴

一九二九年六月二十二日生まれ。五三年同志社大学商学部卒業後、同志社商業高等学校教諭として入社。その後、同志社商業高等学校長、同志社国際高等学校教頭、同志社国際中学校・高等学校校長を歴任し、七十八年十一月には永年勤務者として表彰を受けた。九五年定年退職。二〇〇一年十月二十七日永眠。七十二歳。

一九七八年の十一月、同志社が帰国生徒受け入れのための高等学校を作ることが報道されたしばらく後のことである。

当時同志社大学で学んでいた私は、縁あって帰国子女教育機関設置準備室におられた土山登先生とお会いでき、一九七九年の四月からは一緒に仕事をさせていた。だくことになった。教科も同じ数学だったので、色々なことを教えていただいた。

土山先生は同志社商業高校の最後の校長としての大役を果たされた後、国際高校開設の準備に当たられ、一九八〇年開校という大事業を成し遂げられた。その後ご定年まで八年間教頭、そして七年間校長を務められた。国際中学校・高等学校の将来のことをいつも考えておられた先生は、一九八八年には念願であった中学校の開校を実現され、まさに国際中高の生みの親であり、育ての親であつたとい

える。

あの穏やかで優しい土山先生は、仕事の面では、常に新しいことにチャレンジする気持ちと、それを支える慎重さと根気強さを持つておられた。開校四年目に成績処理用のパソコンが、少し遅れてマークカードリーダーが導入された。当時はアプリケーションソフトというものはなく、パソコンを働かせるためには自分でプログラムを組むしかなかった時代だった。特に機械的な動きをする周辺機器を制御するのは簡単なことではなかったが、先生はこつこつと作業を続けられ、とうとう数学のテスト自動採点システムを完成された。土山先生の根気強さと努力に敬服するのみであった。

一度だけ土山先生と二人でアメリカに出張する機会があつた。英語が得意とはいえない二人だったので、結構愉快なこ

とも多かつた。ある夜、夕食のために出かけたとき、店の中が暗くて、通りからは中の様子が全く分からないレストランがあり、私は少し不安だったのだが、先生は全く迷わずに「ここに入ろうや」とおっしゃつたので、そこで食事をするこ

とになった。もちろん何も問題は無かつたが、先生の意外に大胆な一面を見せていただくことができた。

「土山先生、同志社国際中学校・高等学校は、まだまだ成長の途中にある学校です。これからも波にもまれることがあるかもしれませんが、先生の後を引き継いだ我々は、この学校を大切に、時には厳しく、しっかりと育てていきます。これからも国際中学校・高等学校を、そして我々を見守っててください。心からご冥福をお祈り申しあげます」

川井国孝（国際中学校・高等学校教頭）

お優しかった

片山登美子先生を偲んで



片山登美子氏略歴

一九三〇年三月八日生まれ。五八年日本女子大学通信教育部食物学科卒業後、大阪府堺市立上野芝中学校教諭などを経て、五九年同志社女子大学研究助手として入社。六六年同専任講師、七〇年同助教授、八二年同教授に就任され、八四年十一月には永年勤務者として表彰を受けられた。九五年定年退職。二〇〇二年一月二十六日永眠。七十一歳。

子ちゃんをご出産になり、児童学の学びも終了されました。

先生は、母校卒業後、数年間、故郷の福岡そして大阪で中学の家庭科の教員をしておられたので、家庭科教育の教科教育法（教育実習を含む）も担当されることになりました。

また、私も含めて、片山先生をお姉さまと慕う母校出身教員の後輩が、数人いたわけです。家政学会の全国大会などに度々連れて行ってもらったのも、懐かしい思い出です。

この春、新島会館で先生を偲ぶ会が持たれた後に、ご主人様から頂いたお礼状には「四十年近くの間、母校で教職に従事し、その職を全うできたことは何よりもの幸せでございました」とあり、洋子さんは「母は一生を通じて自分の足で前進する姿勢を変えることはありませんで

した」と述べておられます。

クリスチャンであられた先生が、学内礼拝で、よくお読みになった聖書の箇所は、マタイ福音書の十八章です。「この幼な子のように自分を低くする者が、天国で一番偉いのである」と記されています。

先生は、自分が神から許されなければ生きていくことのできない、幼な子のようないくつ存在であることを知り、それとともに、神がそのような自分のために大事な一人子をくださったことに対して、自分のすべてをささげていきたいと何時も願っていたのではないでしょう。うか。その願いを、嘉し、豊かに祝福された主のみ手の中にあつて、成し遂げられた、先生の数々の忘れられないお働きが、いま懐かしく思い出されます。

馬杉一重（女子大学元教授）

片山先生が母校同志社女子大学の家政学専攻の教員になられたのは一九五九年、私が三年次生の時でした。当時は、調理実習を担当し、学内では、殆ど白衣を着用しておられましたが、すらりとした、とても美しい先生だったのをいまでもよく覚えています。次の年には、実習ハウス（学内の一軒家に家政の学生がグループで宿泊してホームマネージメントを学ぶ実習教科）で、指導を受け初めて、憧れの先生に触れることができました。その時、先生は懐妊しておられ、しかも、その後、担当なさることになる児童学の学びを、日本女子大学家政学部児童学科の通信教育部で聴講生としてお始めになっていたのです。しかも、ご主人は海外留学中、当時の先生は、どんなに大変な日々をお過ごしだったことでしょう。それでも、先生は、無事一粒種の洋

上野瞭先生とのお別れ

人生で大きな影響を受ける人が幾人かいる。上野瞭先生は私にとって非常に大きな影響を受けた人の一人である。一九七四年四月に同期入社（上野先生は四十六歳助教、私は三十四歳講師）以来、研究室がほぼ最初から約二十年間隣同士、家が近いなどで、毎日のように顔をあわせていた。

「昨日寝られへんでな」ということから、「あの映画見たか？」「二体あの人は何を考えているんや？」ということから、「教師は落語家が高座にあがるようなもんや」ということなど、日常的なことやら、高度な人生論まで、本当にいろいろなことを話し、生きる上での重要なことを数多く教えていただいた。その上、先生が著書を出版されるたびにご本をいただいた。著書の中で私は『目こぼし、歌こぼし』や『さらばおやじどの』が好きだった。

上野先生の作品、そして生活の細部にいたる先生の姿勢はどこに立脚していたのだろうか。いつも弱者の側にあり、弱者の痛みへの共鳴であり、その痛みをも

たらずものへの怒りと義憤であった。その文章の言葉のつむぎが選び抜かれ、語彙の多さに感嘆させられ、いつも「おもしろかったです。すごいですね」というつたない言葉でしかお返しできなかった。

次々悩みを相談に来る学生の一人ひとりにも本当に真摯に応じられ、時には解決できないやりきれなさに寝られないことさえあり、まさに心の研ぎ澄まされた先生であった。

先生の奥さまのご両親が病気になるていかれる過程でも執筆を続けられていて、大学のことはあまり考えに入っていないように感じられることもあったし、絶えず貧乏ゆすりをして、「死にそう、死にそう」を連発されていて、私は「何でそんなに死に急ぐのですか？」とよく言っていた。九二年の頃の写真を見るとなんとなく寂しさが漂っているようにみえる。

九四年の春に退職されて、その後「晩年学フォーラム」を毎月一回主宰され、『フォーラム通信』を幾人かの先生と一緒に刊行されていた。話題として「生と



上野瞭氏略歴

一九二八年八月十六日生まれ。五二年同志社大学文学部文化学科卒業後、平安高等学校教諭、同志社女子大学家政学部嘱託講師などを経て、七四年同志社女子大学助教として入社。七九年同教授に就任。九四年、同名誉教授。二〇〇二年一月二十七日永眠。七十三歳。

死」「生き様」などが取り上げられていた。とても大変なお仕事だったと思う。今もこのフォーラムは継承されている。九八年の胆管ガンの手術、その後二〇〇〇年夏から再び悪化。その悪化されている過程での「腫瘍マーカー」の数値の『フォーラム通信』での公表や、今年一月四日に写された小型酸素ボンベを背中にしてカニユーラを鼻に入れて自転車にのろうとしておられる時の写真を見ても、先生は「もの書き（先生の言）としていかに尊厳をもって死ぬかということはずっと考えつづけておられたように私には思われる。

亡くなる二日前にお会いした時、「人間きれいに死ねんもんやな」と言われた。別れる時に私が、「じゃ、また」と言うのと、「またはない！」と言われながらも、最後に先生の方から「じゃ、また」とおっしゃられた。

先生から「じゃ、また」と言われたその時、私は上野瞭先生との永遠の決別の瞬間を崇高な思いで実感した。佐々木佳代（女子大学生生活科学部教授）

人を愛した山根学先生



山根学氏略歴

一九四二年二月二十七日生まれ。六八年同志社大学学院商学研究科修士課程修了後、六九年九月同志社大学商学部助手として入社。七三年同専任講師。七九年同助教、八七年同教授に就任。二〇〇〇年からは商学部長を務められた。九四年十一月には永年勤務者として表彰を受けた。二〇〇二年二月十三日永眠。五十九歳

まったく突然の訃報であった。亡くなられる前日、先生とは研究室でお茶を飲みながら談笑していた。訃報はその次の日のことである。ある日突然親しい人が目の前から消えて居なくなってしまうことに、いまだ現実感が伴わない。

山根先生と私の付き合いは大学院時代に遡る。それ以来の付き合いの中で、お互いに隣に居ることが自然であり、当然であるような存在となった。先生との長い付き合いの中で、いやな思ひ出、苦い記憶というのはまったくない。このような先生の人間は何に由来するのだろうか不思議であった。今振り返ってみると、それは先生の人間好きにあるのではないかと思いつている。

先生は学生が大好き、同僚が大好き、家族が大好きであった。それを周囲の人々も自然に感じ取っていたように思

う。先生の研究室には学生が用事もないのにたむろしていた。山根研究室は同僚の溜まり場で、そこへ行くと誰かが談笑していた。ご家族のことは折に触れて楽しそうに話された。

山根先生の学生、同僚、家族に対する深い思いやりは、先生の言葉の端々に出てきたが、ただその表現形式が独特であった。ボヤキ口調の中にその思いを込められるのである。もともこのボヤキは巧妙で、いつしかこちらにもボヤキ口調になり、そのうちにこちらのボヤキを聞いてもらっているということも多くあったのである。

山根先生の研究領域は、途上国経済論である。インド、エジプトの経済発展構造の分析を経て、西アジア諸国の総合的把握へ進まれた。この研究は、「経済発展の条件として資本、労働力、市場、技

術、政策、国家の安定、世界的環境などが重要である」(商学部父母会講演)という視点に貫かれたものである。門外漢ながら推測するに、このような視点は、先生の元来の人間好きが根底にあり、途上国諸国で暮らす人々への思いを秘めながら、経済発展を中心に社会全体の構造分析に研究を進展させたのではないかと思っている。しかしおそらくは研究半ばであったことであろう。残念でならない。

道半ばという点では、学部長として任期途中での急逝であったこともそうである。先生の脳裏には学部発展のプランが詰まっていたに違いない。これを実現する手立てをもたない先生は悔しがっているに違いない。本当に残念でならない。

鶴飼哲夫(大学商学部教授)